北海道大学所在地の先住民族に対する敬意の表明

わたしたちが学び、働く北海道大学札幌キャンパスのあるこの土地は、先住民族であるアイヌが長きにわたり、暮らしと生業を営んできた場所です。札幌キャンパスを流れる石狩川支流、アイヌ語由来のサクシュコトニ川の川底からは 17 世紀に用いられた木製の漁労具が出土しており、当時すでにアイヌ民族の生業が営まれていたことが分かっています。また、札幌キャンパスのほぼ全域が「K39 遺跡」という埋蔵文化財包蔵地に指定されており、アイヌ史のうち土器を用いていた時代の埋蔵文化財が多く出土しています。

こうした先住のアイヌ民族の暮らしは、たしかに明治初期まで確認することができます。開拓使時代の文書や地図に拠れば、構内の西縁を流れていたセロンペツ川の流域、現在の構内の西南端にある北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション札幌研究林札幌試験地（実験苗畑）付近には、アイヌの人々が暮らすコタン（集落）がありました。セロンペツ川も石狩川支流の琴似川に合流する河川であることから、この集落は近年ではコトニ・コタンと称されることがあります。琴似川は、札幌北郊の茨戸で石狩川本流に合流します。アイヌ語では、石狩川流域とその支流域に拠点を置いたアイヌ民族の集団をイシカルンクル（石狩の人）と呼び、江戸時代の和人（本州方面にルーツを持ち、和風文化を自らの文化とする人々）による古文書にも、札幌にイシカルンクルの人々が住んでいたことが示されています。札幌キャンパスのある場所は、イシカルンクルに属するアイヌ民族が暮らしを営み、生業をおこなってきた土地なのです。

明治以前からイシカルンクルの生活の場であった現在の札幌キャンパスのあるこの土地の一部は、開拓使から当初、ここに暮らすアイヌ民族の「所有地」と認定されました。しかしその後、開拓使の「育種場」に編入され、のちに札幌農学校が附属地として移管を受けたと考えられています。また同じ頃、明治 11（1878）年に漁業資源保護を理由として、サクシュコトニ川とセロンペツ川を含む石狩川支流での鮭鱒漁が開拓使により禁じられ、漁業に立脚した暮らしが成り立たなくなりました。これにより現在の札幌市域に暮らしたアイヌ民族の多くは、石狩川本流の茨戸へ、次いで旭川近文に置かれたアイヌ民族の「保護地」への移転を余儀なくされました。

こうした先住のアイヌ民族の暮らしの歴史的連なりや居住地の移転を余儀なくされたことなどの明治以降の歴史的経緯は、道内各地にある本学の研究林や研究牧場・実験施設・研究施設等においても確認することができます。本学は、明治の初めに和人にとって「開拓」と呼ばれた事業が進められたことにより、暮らしを営んできたアイヌと土地との結びつきが断ち切られ、のちにその場所に本学のキャンパスが設置された経緯を認識し、語り

継いでいきます。そして、札幌キャンパスをはじめとした大学の土地が、アイヌ民族による連綿とした歴史を経てきたことに深い敬意を表します。

本学には現在、いわゆる和人などの社会的マジョリティとともに、先住のアイヌ民族を含む、ジェンダー、障がい、国籍、民族、年齢、性的指向など多様な属性や価値観を持つ学生・教職員が所属していますが、その一人ひとりが公平・公正かつ相互に尊重される学びの場・働く場としての環境を目指した取り組みを進めています。本学は、キャンパスのあるこの土地の歴史的経緯を踏まえ、大学の使命として、アイヌにルーツを持つ構成員が安心して過ごすことができる環境を整備するとともに、学内外のアイヌ民族とその他の大学構成員の共生に向けた取組を進めます。

2026 年 3 月　北海道大学